

令和6年度 第1回岐阜県社会教育委員の会 議事録要旨

1 日時 令和6年6月12日(水) 14:00～16:00

2 場所 岐阜県議会議事堂会議室 第1会議室

3 出席者(委員の現在数14人 出席者14人)

<委員>

天野 知子
井上 吉博
岩田 睦巳
兒玉 哲也
猿渡 真里恵
清水 康孝
益川 浩一
馬淵 浩史
松野 泰啓
水野千恵子
村瀬 眞実
森 清美
山本 真紀
米原木ノ実

<事務局>

環境生活部次長	西 千代美
県民生活課長	森 信輔
生涯学習企画監	安藤由美子
課長補佐兼係長	片岡 留美
課長補佐	永田千奈津

4 報告

(1) 令和6年度社会教育事業について

○事務局より説明

益川議長：ご意見、ご質問等いかがか。

既に公民館研修が実施されているが、今回の講師から学んだことを教えていただきたい。

事務局：大規模公民館であるが、地域をよく見て、あるものをうまく生かすという視点で実践を発表いただいた。

岩田委員：参加者から、自分に何ができるかを考えることができた研修であったと聞いている。

益川議長：岐阜大学の社会教育主事講習はオンラインを最大限に活用して行う。前回より定員を拡大し、準備を進めている。ぎふ地域学校協働活動センター事業も多くの申込がある。委員の市町村においても活用を推奨していただきたい。

5 議事

(1) 社会教育団体への補助金について

○事務局から令和6年度の該当補助金について説明

益川議長：ご意見、ご質問等いかがか。

委員：特になし。

益川議長：補助金については適切であると判断する。有効に活用してよりよい活動をつくっていただきたい。

(2) 次期審議題について

○事務局からこれまでの経緯について説明

益川議長：各委員の専門性を発揮し、会として社会に提言できるとよい。研究・協議の成果が現場に役立つ、現場の人を元気づけることにつながるとよいと考える。次期審議題についてご意見はいかがか。

天野委員：少子化が進む中、核となる子どもの孤立が課題となっている。どうしたらみんなが参加できるようになるか、協議してはどうか。

益川議長：子ども自身の参加をどう保障するか、子ども自身のためになっているかを、地域学校協働活動の中で注目してもよい。

山本委員：「子どもを核とした」を継続すると統廃合、アクティブラーニング等にも視点を上げられる。ただ、社会教育は子どもだけが対象ではないため、広く考えてもよいか。リカレント教育、共生社会、過疎化等に対応する協議もニーズがあると思われる。社会教育委員の在り方について新たな視点を加えて見直すのもよい。

村瀬委員：学校運営協議会と地域学校協働活動の体制は整いつつあるのは確かだが、円滑に進んでいる地域ばかりではない。成熟した地域学校協働活動を追究し、発信していけるとよい。間口を広げるのもよいが、広げすぎると焦点が絞りにくいように思う。

兒玉委員：特別支援学校は地域が広いところもあり、地域との関係は学校により異なる。高等部は企業との連携が多くなる。障がいのある生徒が卒業後に地域でどう活動していくかということも課題である。

水野委員：成果をどう発信するかを考えると難しさを感じる。コミュニティ・スクールは地域により差がある。実態を把握し、困り感に答えられるものができればよい。ウェルビーイングの実現も話題となっているが、地域学校協働活動について継続してもよいのではないか。

益川議長：出口や手法も併せてご意見を伺いたい。

松野委員：これまでは企画者に焦点を当てた研究であった。実際の活動では、当事者である子どもや参加した高齢者等の意見から学ぶことが多い。両者のWINをわかりやすくまとめられるとよい成果物になる。

山本委員：郷土の未来を語る会を実施してきたが、KJ法の定着により、子どもも意見を積極的に発信するようになった。火をつけるのは大人だが、進んでいくと子どもが主体的に動くようになっている事例もある。

清水委員：幼児の段階では主体的に動くことは難しいが、地域との関わりの中で人としての土台をつくる時期ととらえ、活動を進めている。

猿渡委員：子育てに視点を当てると、保護者が置いていかれている感じがする、関わりたいのに関われないという声がある。地域の支援は県内でも差があるようだ。子どもは人と人との間で育つ。子育てを通して保護者が学ぶことも多い。

山本委員：未来に向けて子どもを核にした地域づくりに焦点を当ててはどうか。当事者となる子どもの声はもちろん多様な立場の声を取り上げるとよい。

井上委員：参加者の生の声を届けることは重要である。子どもに焦点を当てながら、生涯学習等に広めてもよい。身の回りの小さなことから自分もやってみようという発想につながることをめざしたい。情報は発信しても届かないことがよくあるが、最近の若者は活動に参加に前向きな傾向もあるため、地域の活動を知る機会になるとよい。

馬淵委員：子どもが主体的に関わって成功した事例から、関わった子どもや大人の思いを取り上げるのがよいのではないか。自治会の活動には参加しないが、子どもの活動には参加するという保護者も多い。子どもまん中社会が叫ばれる中、当事者となる子どもの声を聞きたい。

森 委員：将来を考えると、地域がどんな人を育てていくかに尽きる。中学生は進路を考えてボランティアを行う者も多いと聞く。地域では、その中から真に継続できる人を発掘しているという話を聞く。

松野委員：企画側のキーマンが、参加して変容を見せた子どもと対談するとよい。興味をもって成果物を読んでもらえるのではないか。

米原委員：地域の未来を考えると、大人の幸せを考えるうえで、子どもの幸せは必須である。図書館は子どもにとってのサードプレイスだったという話も心に残る。関わりたいが強制を嫌う大人の気持ちも理解できる。

岩田委員：社会教育は大人も子どもも学び合い育ち合いの場である。大人と子どもの学びのベクトルが双方向である取組を取り上げたい。

益川議長：「子どもを核とした地域づくり」は社会教育の担う大きな部分である。これまで協議を重ねてきた地域学校協働活動は進みつつあるが、課題も残る。委員の意見から、「未来」「双方向」「子ども、若者」「保護者、地域住民」「意見表明」「参画」等が、次期審議題のキーワードとなると考える。

次期審議題については、「社会教育における子どもを核とした地域づくりの未来～子ども、若者、保護者、地域住民の意見表明（参画）～」を候補とし、事務局、議長で案を作成することとしてよいか。

また、研究、協議を進めるに当たり、事例発表、対談等、生の声が聞けるような手法を検討する。出口のイメージは、紙ベースの成果物等を考えることとしてよいか。

山本委員：対談はHPにリアルタイムで掲載するのもよいのではないか。

委員：異議なし。

益川議長：議事が終了したため、進行を事務局へお返しする。